

## 「教育ファームに関する意見交換会」概要

日 時 : 平成21年11月18日(水) 13時30分～16時00分  
場 所 : 秋田県 秋田市文化会館  
主 催 : 東北農政局 青森農政事務所、岩手農政事務所、秋田農政事務所

### 1 主催者あいさつ 東北農政局 秋田農政事務所長 綿谷 弘勝

北東北3県の教育ファーム取組を拡大・充実する事を目的として、情報提供および教育ファームに取組んでいる団体より事例紹介いただき、市町村における教育ファーム推進のため意見交換をお願いする。

### 2 情報提供

#### 「教育ファームの推進に向けて」

東北農政局消費・安全部 消費生活課 食育情報専門官 新井 憲一

教育ファームは食育に繋がる取組であり、補助事業により取組の効果が確認されている。地域として連携した形で推進計画を作り、いろいろな体験をしたり、利用し易い環境を整えて欲しい。

#### 「秋田県内のグリーン・ツーリズムの取組」

秋田県農林水産部 農山村振興課 技師

佐藤 恵一 氏

グリーン・ツーリズムの取組として、農家民宿・農家レストラン・市民農園・農業体験受入れ等を実施している。

農山村振興課では、食育としての農家民宿・農業体験、国際教養大学や秋田県立大学など農業に関心のある若者の農家体験、「田舎で働き隊」などの取組を通して、教育ファームをサポートしていきたい。



### 3 事例紹介

#### 「達者村での取り組み」(青森県)

青森県南部町 農村交流推進課 総括主査

北上 隆広 氏

南部町全体を達者村と称して取組を行っている。

「ずっぱど農園」は、会員制指導者付き管理ほ場で、農家が計画表を作成し毎週水曜日に実施している。

農業体験だけではなく、豆腐や味噌を作るなど随時アイデアを加えて活動している。

「子ども農村プロジェクト」は、りんごともち米の農業体験、農家民宿を実施し、そば打ちなども行っている。



ポイントは、自然が相手なので日程に余裕をもち、学校との打合せを2月頃までに行い、双方の日程の共有が必要である。

今後の課題は、①目的や効果を明確に示す、②受入れ農家だけでなく関係団体の人材活用、③補助金や助成金に頼らず収穫した野菜や加工品を販売して活動費とする、④教育ファーム推進の指針の明確化などである。

#### 「JAが取り組む食農教育“ちゃぐりんスクール”」（岩手県）

花巻農業協同組合生活福祉部 生活ふれあい課 調査役 福田 寿子 氏

「食と農の仲間づくり」を目指し、小学生を対象に「ちゃぐりんスクール」と称して「命、農業、食べ物の大切さ、ふるさとの誇り、JAの役割」を教えて7年目になる。

今年度は“やってみよう！「おでん作り大作戦」”をテーマとして、JA新採用職員・JA青年部・JA女性部・管内高校生と農家のボランティアをスタッフとして、年8回実施している。案山子とてると坊主作りからはじめおでんの具材となる野菜を栽培した。更に、豆腐作りや地引網引き体験なども実施した。

また、児童の保護者を対象に食育の必要を感じ、「保護者食育レッスン」として料理講習会や研修会も開催した。

活動の成果は、家族の会話が増え、食べ物に関心を持つようになり、農業の知識を持って、学校では得られない体験ができたと感想を得た。

参加した小学生は、JA・高校生・地域の人とのふれあいを通じ、積極性と協調性が育ったと感じる。

今後の課題は、学校では得られない体験のPR、活動地域の拡大、生産者・消費者・JAの連携などである。



#### 「家族そろって わくわく野菜作り体験活動」（秋田県）

特定非営利活動法人 子育て・高齢者介護サポート  
ばっけの会 理事長

松村 康子 氏

子育て支援活動で、子どもの行儀から食生活まで指導が必要と感じ、この取組を始めた。家族のふれあいの場として取組、父親の参加も年々増加している。

また、託児所を設け、小さい弟妹のいる家族も安心して参加できる体制とした。

年6回の活動で、種まき・植付け・除草・自然観察・収穫・調理体験を実施し、小さな1粒の「種」から大



きな大根に育つ感激を体験している。

採りたての野菜は市販の物と比べ香り・味が違うことも体験させ、食べることに  
対して「いただきます」と「ごちそうさま」を教えている。

体験後は修了証書を発行し、参加した親と子どもからアンケートを取り、次年  
の取組の参考としている。

今後の課題は、近場に農地の確保、作業協力団体との連携づくりなどである。

#### 4 意見交換



教育ファームの取組みの事例紹介に関しては、活動経費として参加費を頂いているが不足しており、補助金・助成金を受けて対応している。

特に移動費用に経費を必要とするので、近場の農地を確保し現地集合とすることで経費を削減したいとの意見があった。

また、農作業の指導者について、農業者の説明は専門的すぎて子ども達には難しいとの意見があったが、教育ファーム実施主体であり農業者でもあるJA青年部からは、子ども達にわかりやすく飽きないよう工夫し、楽しんで学べるよう指導している事例が紹介された。

教育機関において既に実施されている農林漁業体験・教育ファームとの違いについて、「農家や異なる世代とのふれあい」があり地域を巻き込んだ取組となり同じ体験をしても学校での体験学習とは異なるとの意見や、文部科学省と農林水産省の連携が重要との意見があった。

教育ファーム推進に関しては、農業体験を行いたいニーズがあっても、受け入れ体制が整っていないのでこの辺をサポートして欲しい。市町村とJAのイベントが重なることがあり、お互いに参加者が少なくなるため連携が必要。既に健康部門・教育部門で計画を立ていろいろな取組を行っている中で、更に「教育ファーム推進計画」を策定する必要があるのか等の意見があった。

東北農政局からは、計画を策定することにより取組が拡大し、食育の理解が進んで健康増進に繋がる。教育ファームについては実施効果が確認されており、既に取組んでいる団体や、これから取組を行う団体をサポートする窓口や役割りが定まることによって、この取組が更に進むと考えている、食育推進計画・教育ファーム推進計画の策定をお願いしたいとの説明があった。

また、秋田県からは「食育」という言葉が広まってきたので、この機会に市町村食育推進計画を策定して頂きたいとの発言があった。